

先土器時代終末期から縄文時代 草創期初頭にかけての尖頭器文化

— 風間 I a 石器文化層の位置づけ —

麻 生 順 司

はじめに

近年、相模野台地を中心とする神奈川県下において先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭に属する遺跡の発見が相次いでいる。もともと相模野台地はこの台地面を解析しながら南下する中小河川沿いに数多くの先土器時代からの遺跡が調査されており、また、その堆積土壌の厚さからかなり細かな遺跡の移り変りが認められることでも知られている。このため、特に先土器時代終末期の細石刃文化や尖頭器文化から縄文時代草創期初頭の隆起線文土器文化に至る文化層が各段階に細かく設定されつつある。しかしながら当該期の段階設定においては土器の共伴の問題や石器組成のあり方、あるいは他地域の石器群との関係などに多くの矛盾や問題点が残されているものと思われる。

筆者は神奈川県津久井郡城山町に位置する風間遺跡群第1地区の調査において当該期に属する尖頭器石器群を確認し、その報告を行っている（麻生 1989）。拙論は、この石器群を中心に当該期の編年についての一考を述べてみるものである。

1. 風間遺跡群第1地区第I文化層（a）

風間遺跡群は、神奈川県津久井郡城山町川尻字風間5394番地他に所在し、相模野台地の北端に位置する。地勢的には城山湖付近を源とする境川の上流域に位置し、関東山地より派生し境川に向かって北東向きに張り出す舌状丘陵上にあたる。この調査は、法政大学多摩校地城山地区建設に伴う事前調査であり、本論で使用する石器群が検出された第1地区はこの丘陵部から連続して境川に面する低位段丘面上に位置し、境川との比高差は約6mである。

＜出土層位＞

本地区の基本層序は、二次堆積の可能性が高い黒色土（黒ボク土）下よりローム層が確認され、そのローム層最上部に立川ローム最上部ガラス質火山灰（UG、約13,000～14,000年前）が検出されている。この赤褐色土の下に約40cmほどの黒色帯（B₀）が確認され、色調によって二枚に細分されている。風間遺跡群第1地区第I文化層（a）（以下風間I aと呼ぶ）はこのB₀上部にそのピークが確認されている。風間I aはその石器群

の特徴からソフトローム層あるいは黒色土に至る漸位層に属するものとする意見もあるが、調査時の所見から見ると、本地区ではソフトロームがほとんど確認されず、UGが確認された層序からハードローム層であり、風間Iaの出土層位がそれ以下であることは報告書の巻頭写真からも明らかである。この層位的状況から調査当初は確実に先土器時代に属するものとして風間Iaの石器群を考えていた。今回の石器群の検討では後に延べるように寺尾段階以後に比定したが、当該期の他遺跡の出土層位であるソフトローム層との矛盾点や、UG年代（13,000～14,000年）以前という年代観についての問題は解消されていない。さらに、栗原中丸遺跡第Ⅲ文化層（鈴木 1984）でもB₀から大形尖頭器が出土しており、その関連も注目される。また、本文化層は、尖頭器石器群と細石刃関連石器群とが同一レベルで検出され、両石器群との関係が問題となったが、それぞれの石器群の平面的位置関係、素材となった石材の偏り方や石器群の特徴から時期的に時間差を持つものであり共存関係とすることはできない。

＜石器組成＞

風間Iaからは計161点の石器が出土している。これらの石器の器種別の内訳は、尖頭器24点、スクレイパー12点、二次加工のある剥片5点、使用痕のある剥片6点、剥片類108点、敲石4点、その他2点であった。このように本石器群は、定形石器としては尖頭器とスクレイパーの二器種が確認されたにすぎず、非常に単純な石器組成を示しているといえる。また、石質別ではチャートが6割以上を占めて主体となる石質となっているが、定形石器では比較的単独母岩のものが多く見られている。

＜尖頭器＞

風間Iaの主体をなす定形石器としては24点の尖頭器があげられるが、接合資料と風間Ibとの混在と考えられる尖頭器が3個体認められることから、最終個体数としては26個体の尖頭器が検出されていることになる。

これらの尖頭器はその大きさによって2群に大別され、さらにその形状等により細分されている。

I 群－長さが10cmを超す大形の尖頭器

- a 類－左右対称の幅広木葉形を呈するもの
- b 類－左右非対称で幅広の半月形に近い形状のもの
- c 類－左右対称で細身の柳葉形を呈するもの
- e 類－左右対称で菱形に近い形状のもの

II 群－長さが10cm未満の尖頭器

- a 類－左右対称で木葉形を呈するもの
- b 類－左右対称で最大幅を胴下半部に持つもの
- c 類－左右対称で菱形に近い形状のもの

以上のように大きさとその形状により2群7類に細分され、各群に破損品あるいは未製品が存在する。

この分類から本尖頭器石器群の特徴として以下の点をあげることができる。まず、Ⅰ群・Ⅱ群とした大きさによる大別であるが、本尖頭器群は各尖頭器によって大きさに差が見られ、長さ5cm前後の小形のものから最大17.9cmを測るものまで見られたために行なったものである。その中で10cmを超す大形のものが26個体中7個体も確認されている。また、このような大きさによる差はその素材となった石質にも特徴が見られており、Ⅰ群の大形尖頭器ではホルンフェルス、安山岩などを主体とし、Ⅱ群ではチャートが主体となっているという偏りが見られている。

では、このような大きさや素材の異なる2種類の尖頭器の出土状態を第8図で見ると、Ⅰ群とした大形尖頭器は5号ユニットを除く各ユニットから1点あるいは2点と点数的には少ないものの平均して確認され、それらに中・小形の尖頭器が伴って出土している状況がうかがわれている。これらのことから風間Ⅰaの尖頭器群には大形の尖頭器が安定して存在し、その大きさの必然性を持って作出されていたものと考えることができよう。そしてこれらの尖頭器は製品だけの単独母岩として持ち込まれているものが多く見られており、特にⅠ群とした大形尖頭器ではその調整剥片やチップも確認されていない。また、Ⅱ群としたチャート製の尖頭器の一部には同一母岩の調整剥片が確認されているものも見られるが、点数的には少ないもので本遺跡内で製作されたものとは考えにくい出土状態を示している。

次に形状について見てみると、Ⅰ群では同類のものが見られずそれぞれの形状のものが単独に大きな特徴を持つものとなっているが、a類の木葉形を呈するものはⅡ群を含めると本尖頭器群で最も多く見られており、主体となる形状といえることができる。また、e類の菱形の形状を持つ尖頭器は、両側縁が「く」の字状に明確な角を持ち、基部が直線状に加工されているものとしたもので、この形状の尖頭器はⅡ群と破損品を含めて6例確認されていることから本尖頭器群の中で意識的に作出された一形態として捉えることができよう。本尖頭器群のこのような特徴は本遺跡の編年の位置づけに当たっても大きな注目点と考えることができ、栗島義明も当該期に特徴的に認められることを指摘している（栗島1991）。一方、幅広半月形状のものは本石器1点だけの出土であり、Ⅱ群にも同形状の尖頭器は見られないものである。c類の細身で柳葉形を呈するものも長幅比が4.6:1と最も大形で細身のものであり、半月状を呈するものとともに本尖頭器群の中で特異な例としてあげられよう。

以上のような尖頭器の出土状態あるいはその観察から風間Ⅰaの尖頭器の特徴をまとめると、大形の尖頭器はホルンフェルス・安山岩を主体とし、中・小形の尖頭器はチャートを主な石材として、完形あるいは完形に近い未製品として持ち込まれ、中形の木葉形と両

側縁が「く」の字状に明確な角を持ち、基部が直線状に加工された尖頭器を中心に大形の尖頭器が数点ずつともなう尖頭器群ということができよう。

＜スクレイパー＞

風間 I a からは数少ない定形石器として尖頭器とともに12点のスクレイパーが検出されている。接合例が2例見られるために個体的には10点の出土となるが、これらのスクレイパーも尖頭器とともに他遺跡では見られない多くの特徴を持つものとなっている。

まずもっとも大きな特徴として両側縁に半円形の調整加工を入念に施し、平面形が分銅状を呈する複刃の削器があげられよう。このような特徴的な挟入削器は計3点が確認され、素材となった剥片、調整加工の位置や加工方法などの統一性から、ある規格を持った定形的な削器の一樣相として捉えることができよう。

本遺跡からはこの分銅形状のものを含めて計6点の挟入削器が確認されており、それぞれに施されたノッチの大きさや形状から丸い棒状のものを加工するために用いられたものと推測される。また、これらの出土状態を第8図で見ると、本遺跡のもう一つの定形石器である尖頭器との関連が強うかがわれ、特に分銅形状の削器と大形尖頭器の間には有機的な結びつきが認められる。

一方、挟入削器以外のものとしては典型的な凸刃搔器の存在もあげられる。幅広の横長剥片を素材とし、その打面を取り去りながら長軸の両側縁に丁寧な調整剥離が施されたもので、刃部は下端で半円状につながっているものである。

2. 相模野台地の様相

前章までに風間 I a の石器群の特徴について報告書に記載できなかった部分を含めて細かな観察を行ってきたが、これらを要約すると以下のようにまとめることができよう。

遺物の出土層位はUG下のハードローム層にすべて包含されており、定形石器としては尖頭器とスクレイパーの単純組成である。尖頭器は小形から大形のものが見られ、それぞれが平均して共伴している状況がうかがわれる。尖頭器の形状的な特徴としては木葉形あるいは柳葉形の尖頭器を主体として両側縁が「く」の字状の角を持ち、基部が直線状をなす尖頭器が安定して認められていることがあげられる。これらの尖頭器に有機的な関連を持つスクレイパーは分銅形状を呈するものを最大の特徴としたノッチを持つ挟入削器群の安定した出土等があげられよう。

それでは次に、このような風間 I a の石器群の特徴をもとに風間遺跡が立地している相模野台地の当該期の遺跡をいくつかあげて対比してみることにしよう。

相模野台地は、近年先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器石器群が相次いで発見されていることで注目されている。風間 I a に関連する遺跡としては寺

尾遺跡第Ⅰ文化層（白石 1980，以下寺尾Ⅰと呼ぶ），勝坂遺跡L₁S上部文化層（青木 1990，以下勝坂），長堀北遺跡第Ⅱ文化層（小池 1991，以下長堀北Ⅱ），月見野遺跡群上野第Ⅰ地点第Ⅱ文化層（相田 1986，以下上野Ⅱ），相模野第149遺跡L₁S上部文化層（鈴木 1989，以下相模野149）等が代表としてあげられよう。

まず，寺尾Ⅰから見てみると，寺尾Ⅰの主な石器組成としては尖頭器，石斧，搔器，削器，舟底形石器，細石刃等があげられる。尖頭器は小形から大形のものまで見られるが，大形のは細長い柳葉形を呈するものが多く，風間Ⅰaのような大形で幅広の尖頭器は見られない。しかし基部の形状を見ると風間Ⅰaと同様に直線状に調整加工を施しているものも観察される。石斧はいわゆる神子柴・長者久保系の打製・磨製石斧である。搔・削器では搔器に風間Ⅰaに類似した先刃搔器が見られているが，削器では風間Ⅰaに特徴的であった挟入削器は見られていない。舟底形石器については報告者の白石浩之は同一文化層から出土している細石刃とは石質が異なること，関東地方では一般的でないことから舟底形細石刃石核ではないとしている（白石 1990）。一方，鈴木次郎は長軸方向の両端に見られる敲打痕から敲石とする（鈴木 1989）等の解釈が見られているが，近年，相模野台地の当該期の石器群には上野Ⅱ，勝坂，長堀北Ⅱなどで明確な舟底形細石刃石核が確認されてきていることから，ここでは舟底形細石刃石核のブランクとして捉えておきたい。

この寺尾Ⅰの石器群の内容を見てみると尖頭器の主体性や搔器などに風間Ⅰaと同様の傾向が見受けられるが，尖頭器に大形で幅広のものが認められないことや石斧・細石刃石核の存在というように前段階の様相も見受けられることなどから，風間Ⅰaよりもやや古い様相として考えられる。

このような寺尾Ⅰと同様な石器組成を持つ遺跡としては勝坂，長堀北Ⅱ，上野Ⅱが含まれよう。勝坂では当該期の住居址状遺構に伴って尖頭器，削器，細石刃石核，細石刃等が出土しており，大形・中形のやや細身の尖頭器を主体として舟底形細石刃石核が伴うという石器組成が見られていることから，石斧類の出土は見られなかったものの，寺尾Ⅰにほぼ並行する時期に位置づけられよう。報告者の青木豊・内川隆志は勝坂の石器組成に有舌尖頭器が認められるものとしているが，この石器は風間Ⅰaで認められた両側縁が「く」の字状を呈し基部を直線状に調整する尖頭器として捉えられるもので，勝坂には有舌尖頭器は組成しないものと考えられる。逆にその点に注目すればこの特徴は風間Ⅰaに連続して行く様相として注意されよう。上野Ⅱでは大形から小形の尖頭器を主体として搔器，削器，石斧，舟底形細石刃石核が認められている。尖頭器は全体にやや細身で中形の尖頭器を中心に小形と大形の尖頭器が伴うという特徴が認められ，他器種を含めて寺尾Ⅰとよく似た石器組成と捉えられる。長堀北Ⅱの尖頭器は全体的にやや幅広の様相が認められ，風間Ⅰaとの類似性も指摘できるが，ノッチを持つ削器が見られないこと，そして舟底形の細石刃石核が共伴することから，風間Ⅰaに先行するものとしておきたい。

一方、このような寺尾Ⅰに代表され、風間Ⅰaに先行するものと考えられる石器群とは異なる様相を持つ石器群として相模野149があげられる。相模野149は有舌尖頭器、尖頭器、搔器、削器、石斧状石器等の出土が見られているが、定形石器は量的に少ないものであった。主要器種となる尖頭器も4点の出土であり、しかも大半が欠損品であることから、その特徴を捉えることは困難であるが、中形柳葉形と大形木葉形の尖頭器で構成されているようである。大形木葉形尖頭器の存在はノッチを持つ抉入削器の共伴とともに風間Ⅰaに類似する点としてあげられるが、寺尾Ⅰの時期に特徴的に見られた石斧類や細石刃石核が認められず、より後出性の高い有舌尖頭器を持つという石器組成は、風間Ⅰaに後続する石器群として位置づけることができよう。

3. 他地域の石器群との比較

前章では風間遺跡が立地している相模野台地で当該期の関連遺跡を通じてその前後関係を明らかにすることができた。そこで今度は対象遺跡をさらに広げて他地域の関連遺跡を含めて風間Ⅰaに類似する石器群を抽出してみることとしたい。

まず、相模野台地と武蔵野台地の間に位置する多摩ニュータウン遺跡群にその類例を認めることができる。多摩ニュータウン遺跡群Na27（岡崎 1979、以下TN27と呼ぶ）は風間遺跡とも比較的近い位置関係にあり、遺跡としての立地環境も背後に丘陵部を持つ平坦面に位置しているという共通関係が認められる。石器組成は小形から大形の尖頭器を中心に石斧、抉入削器が組成として見られており、打製石斧の存在を除けば風間Ⅰaと非常に近い石器組成を示している。また、素材となった石材も実見したところチャート⁽¹⁾を主体にホルンフェルス・凝灰岩などが見られ、その質感も非常に似通ったものとなっている。

個々の器種についてみると、尖頭器は大形のものに幅広木葉形のものと両側縁が平行する柳葉形を呈するものが存在し、小形から中形の尖頭器でも木葉形あるいは柳葉形を呈するものが見られ、さらに基部を直線状に整形している尖頭器が確認できる。削器においても風間Ⅰaのような分銅形にまでならないものの幅広の縦長剥片を素材とし、その両側縁には円を描くようなノッチを作出しているものや、縦長剥片の両側縁に上下にずらしてノッチを施しているような抉入削器が認められているなど、打製石斧の存在を除くと風間Ⅰaの石器群に見られた特徴がすべて認められる。

このようにTN27の石器群は石質や石器群の様相が風間Ⅰaに酷似していることから、時期的にほぼ並行するものとして位置づけられよう。

このTN27のように風間Ⅰaと時期的に並行すると考えられる他の遺跡としては、長野県下茂内遺跡第Ⅰ・Ⅱ文化層⁽²⁾（近藤 1992、以下下茂内）、群馬県房谷戸遺跡第Ⅰ文化層（群馬県史編さん委員会 1988、以下房谷戸）があげられる。下茂内は第Ⅰ・第Ⅱ文化層

を合わせるとその出土点数は100,000点を超すという膨大な量の石器が出土している遺跡である。しかしながら、定形石器としては未製品を含む尖頭器約280点を主体として搔・削器が数十点見られるだけの単純組成であり、残りの90,000点を超す石器はすべて尖頭器の製作にかかわる剥片・碎片であるという。この下茂内の定形石器を見てみると、やはり小形から大形の尖頭器が確認され、基部を直線的に仕上げている例が認められる。また、風間Ⅰaで特異な尖頭器として見られた半月形状を呈する尖頭器が認められることは注意しなければならない点であろう。削器も尖頭器製作剥片を素材としたものながらノッチを持つ挟入削器が安定的に認められる点が特徴としてあげられる。

次に房谷戸は未報告ではあるが、やはり9,000点もの石器の出土が見られているものの、その組成は未製品を含む尖頭器約30点、搔器数点⁽³⁾という組成であり、残りはすべて尖頭器の作出剥片あるいは碎片であるということである。尖頭器はやはり小形から大形のものが見られ、大形のものは幅広で、中形のものに基部が直線状を呈するものが確認される。

4. 風間Ⅰaの編年的位置づけ

前章までに風間Ⅰaの石器群の再検討と当該期に並行あるいは前後する可能性が認められる石器群として、関東地方を中心にいくつかの遺跡をあげて検討を行ってきた。そこで得られた特徴をもとにこれまで述べてきた遺跡の石器群を大きくまとめると、いわゆる「神子柴・長者久保系石器群」として捉えられることができよう。しかし、これらの石器群はその組成や個々の石器の特徴から、それぞれに影響を与えつつ3段階に流れのピークを持ちながら変化して行く様子がうかがわれる。そこで、これを段階として捉えてその編年観を考えて見ることにしたい。

まず、第1段階として寺尾Ⅰをあげることができよう。この石器群は小形から大形の尖頭器を主体として、断面三角形の打製石斧を代表とする打製・磨製石斧類や当該期に特徴的に見られる先刃搔器が組成に伴うものとして、最も神子柴・長者久保系石器群の影響を受けたものとして捉えられよう。この段階を「寺尾段階」と呼ぶことにする。そしてこの寺尾段階に組成として見られるものに舟底形細石刃石核の存在が認められる。

この寺尾段階に並行する遺跡として、勝坂、長堀北Ⅱ、上野Ⅱがあげられよう。勝坂、長堀北Ⅱにはいずれも石斧は伴わないが、勝坂の尖頭器の特徴としては大形のものは細身の柳葉形を呈しているということが言えようか。そして、幅広木葉形を呈するものは中・小形の尖頭器に見られているようである。その点から見ると長堀北Ⅱでは大形のものにもやや幅広の尖頭器が見られていることから、やや次の段階の影響を持っているものとしても考えられるかもしれない。さらに、寺尾Ⅰや勝坂では、尖頭器の形状に両側縁が「く」の字状に明確な角を持ち、基部を直線的に整形しているものが認められることから次段

階への変化が認められる。本段階はこのような特徴を持つ尖頭器に舟底形細石刃石核が伴うことで寺尾段階として捉えられよう。また、上野Ⅱは石斧の様相はやや異なるものの⁽⁴⁾、やはり小形から大形の尖頭器を主体として舟底形細石刃石核が組成に認められるものとして寺尾段階に属するものとする。

このように寺尾段階の大きな特徴としては、小形から大形の尖頭器を主体としてそれに石斧や舟底形細石刃石核が伴う段階としてまとめられよう。この神子柴・長者久保段階は先土器時代と縄文時代をつなぐ文化として捉えられており、その先土器時代の終盤に細石刃文化が出現し、この細石刃文化がその石核によって「角柱・稜柱形」→「舟底形」というように大きく変化していくことは周知の事実である⁽⁵⁾。この点からも寺尾段階が細石刃文化の影響を保持しつつ神子柴・長者久保系の石器群の影響を受けて成立したものと言うことができよう。

次に、この寺尾段階に続く第2段階としては風間Ⅰa、TN27、下茂内、房谷戸の石器群があげられよう。この段階を「風間段階」とすると、この段階は風間Ⅰaの特徴としてすでに述べているように寺尾段階から続く小形から大形の尖頭器を主体としながらも、大形の尖頭器に細身の柳葉形を呈するものと幅広の木葉形を呈するものが安定的に存在する点が特徴としてあげられる。さらに、寺尾段階に見られた側縁の形状が「く」の字状を呈し、基部を直線的に仕上げた尖頭器が顕著に認められる点もあげられよう。

また、風間Ⅰa・下茂内には非常に類似した半月形状の尖頭器も確認されている。この形状を持つ尖頭器は小野田正樹によって再検討され、神子柴・長者久保段階に特徴的に認められる石器として注意されている⁽⁶⁾。そして、このような尖頭器とともに新たな組成として、風間Ⅰaの分銅形状を呈するものを最大の特徴とする大きなノッチを持つ抉入削器の出現も本段階の大きな特徴と言える。しかしながら、風間Ⅰaには寺尾Ⅰに類似する先刃状の搔器の存在も認められることから、前段階の影響も残されているようである。

ところで、この風間段階の石器群には下茂内や房谷戸のような多量の尖頭器製作剥片が出土する製作址遺跡と、風間ⅠaやTN27のような尖頭器を搬入して使用するような遺跡のあり方が認められるようである。前章までに検証してきた遺跡は、いずれも尖頭器製作剥片が認められてもその数はそれほど多いものではなく、特に風間Ⅰaの大形尖頭器では同一母岩の剥片類がまったく認められていない。また、中・小形の尖頭器でも同一母岩の剥片は認められるものの尖頭器の点数から見てその数は非常に少ないものであった。このことから風間Ⅰaの尖頭器石器群が完形または未製品の状態で他地域から搬入されたものである可能性が高いことは報告書でも指摘したところである。

このような2種類の遺跡のあり方は、尖頭器を製作する遺跡とそれを搬入して使用する遺跡として捉えられ、そこに需要と供給という有機的な遺跡間の関連を推測することもできよう。このような点から、製作址として捉えられる下茂内や房谷戸で未製品とされた尖

頭器は搬出する尖頭器としては完形品として考えることも可能ではないだろうか。そして搬入された遺跡においてその使用目的に応じて更に調整を施して使用されたものと推測される。





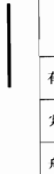
これらのことから、特に当該期の遺跡に良く見られるような単独母岩の多い遺跡では、その搬入品を製作した遺跡の解明も重要な視点と考えられ、その搬出された石器の大きさや形状、そしてその製作址から読み取れる石器群の特徴なども検証していく必要性があるものと思われる。

第3段階としては相模野149があてられよう。相模野149では大形の尖頭器に幅広木葉形のものと細身の柳葉形のものが見られ、挟入削器も認められるという風間段階の特徴が見られるが、より後続する石器である基部に挟りを持って舌部を作出した有舌尖頭器が新たな組成として加わり、縄文時代的な石器群の様相が見え始めると言う点で第3段階とする。しかしながら、相模野149は前述したように本段階の基本例としてその様相をすべて現している遺跡とは言い難く、段階設定のよりどころとした有舌尖頭器は単独母岩で搬入品と考えられている（鈴木前掲）ことから共伴関係が明確には捉えられない状況も認められる。このため、本段階の設定にあたっては有舌尖頭器を初めとする植刃あるいは植刃状の両側縁の平行する細身の尖頭器のようなより後続する縄文時代的な石器が組成として加わるという、所謂「本ノ木型石器文化」としてまとめられるものを示すものとし、「本ノ木段階」とする。

この段階に属する他遺跡としては、尖頭器を主体として挟入削器が見られながら有舌尖頭器や植刃状の尖頭器が共伴するという相模野149に類似する本ノ木遺跡（芹沢・中山 1957）や前田耕地遺跡（秋川市教育委員会 1977他）、山形県弓張平遺跡（加藤 1978）を代表としてあげることができよう。さらに植刃状の両側縁の平行する細身の尖頭器が特徴的に認められる遺跡として群馬県赤堀石山遺跡（相沢 1967）、千葉県南大溜袋遺跡（戸田 1973）、元割遺跡（田村 1986）、弥三郎遺跡（織笠 1992）等が本段階に含まれよう。

一方、神子柴・長者久保文化とする石器群の特徴としては、上述した石斧や尖頭器のあり方だけではなく、石刃やその石刃を素材とした彫・搔器などの石器群の存在も見落とすことができない点としてあげられる。このような石刃や石刃を素材とした石器を含む当該期の石器群は、北海道から東北・北陸にかけて多く確認されており、関東近県では茨城県後野遺跡（後野遺跡調査団 1976）に認められる程度である。特に東北北部から北海道に顕著な分布が認められることから、典型的な神子柴・長者久保系の石器群は、北海道あるいは東北北部よりごく短い期間の内に南下しながら広がって行ったものと考えられるが、本論で検討した関東の神子柴・長者久保系石器群は細石刃文化が衰退するとともに尖頭器の系統のみが伝播され、石刃技法を持たないという地域性を持って独自に進化し、風間段

第1表 関東地方における「神子柴・長者久保」系遺跡の編年

時 代	遺 跡	土器	細石 刃核	尖頭器	抉入 削器	有 舌 尖頭器	特 徴
縄 文 ／ 先 土 器	隆起線文系土器文化 ↑						
	相模野149 本ノ木 前田耕地						有舌尖頭器 植刃
	風間 Ia TN27 下茂内 房谷戸						尖頭器基部直線化 抉入削器
	寺尾 I 勝坂 長堀北 II 上野 II						舟底形細石刃石核
	↑ 細石刃文化						

階にそのピークを迎えたものと考えられる。しかし、その後の本ノ木段階では新たに北陸・上越方面から有舌尖頭器や植刃状の尖頭器に代表される「本ノ木型石器文化」が波及してくる様相が認められるが、北陸→北関東→東京→千葉というように点在しながらも線的に結ばれる当該期の傾向が南西関東では明確に認められないということは、これらの伝播経路からはずれた地域として考える必要もあろう。このように先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけてはいくつかの系統の石器文化が派生したものと考えられ、各地域によって直接的な伝統が見られる遺跡や、変質化する遺跡、あるいは影響をうけない遺跡等がほぼ同時期に存在していたものと考えられる。

「神子柴・長者久保系石器文化」・「本ノ木型石器文化」についての系統と編年の位置づけについては長い間問題となっていた点であり、当該期に関する編年についてはいくつかの論稿が見られているものの、必ずしも一致した結論を見ていない。近年における代表的編年としては、まず、岡本東三の編年があげられよう。岡本は当該期に特徴的に見られる石斧を中心にその編年を組み立て、長者久保→神子柴→鳴鹿山鹿という編年の骨子を設定している。しかしながら、関東の寺尾の位置づけに関しては共伴する土器から隆起線文系土器群の後に置いており、神子柴・長者久保系の石器群がこの段階まで連続するものとしている（岡本 1979）。また、白石浩之は本ノ木遺跡と寺尾遺跡の再検討の中で、石器群の位置づけの中から土器を系列別に配列し、寺尾、相模野149、上野1を最も古い段階に置き、本ノ木、前田耕地、風間をそれに続くものとしている（白石前掲）。一方、栗島義明は上ノ平遺跡の再検討の中で、尖頭器あるいは削器の形態的特徴から、すでに寺尾→風間→前田耕地という位置づけを発表され、風間を「前後の石器群の様相を共有した、言わば折衷的な石器組成を保有している（栗島前掲）」ものとしており、本論も基本的には栗島編年に準ずる結果となった。

それでは、この3段階にわたる神子柴・長者久保系石器群にはどのような形で土器が出現してゆくのだろうか。

今回検討した遺跡群の中で土器が確認されている遺跡としては、第1段階の寺尾 I、勝

坂, 上野Ⅱ, 第3段階の相模野149, 本ノ木, 前田耕地の計6カ所の遺跡で出土が見られている。⁽⁷⁾これらの土器が確認されている遺跡の中で最も問題となる点は、従来からその編年の位置づけが問題となっている寺尾Ⅰから出土した土器であろう。調査当初はその土器が押圧縄文系に属すると考えられたことから、石器群とともに隆起線文系以降に位置づけられていた。しかしながら、その石器群の様相は本論で位置づけているように神子柴・長者久保段階の最も古い石器群として捉えられるものであり、調査者の白石浩之もその再検討を行っている。⁽⁸⁾

筆者は寺尾段階に押圧縄文系の土器が供伴する可能性を全面的に否定するものではないが、寺尾段階として位置づけた勝坂, 上野Ⅱでは無文の土器が出土しており、第3段階とした前田耕地では、土器が見られず有舌尖頭器が出土する2・4・5集中地点と、無文土器が供伴し有舌尖頭器の見られない第6集中地点では層位的な上下関係が存在するという指摘があり、⁽⁹⁾第6集中地点が寺尾段階として捉えられる可能性も考えられる。また、他地域で当該期に属し土器の共伴が見られる遺跡として東京都田無南町遺跡（小田 1990）、茨城県後野遺跡、新潟県大刈野遺跡（佐藤 1988）、青森県大平山元遺跡（三宅・岩本 1976）などが見られるが、いずれも出土している土器は無文土器であることなどから見ると、この第1段階は土器が伴うとしても無文で平口縁を持つ土器が共伴する可能性が高いものと思われる。第8図の寺尾遺跡の分布図を見ると細身の尖頭器が11・13・14・18ブロックからまとまって検出され、さらに舟底形細石刃石核としたものがその南側に偏って確認されていることから、このような寺尾Ⅰの石器群や土器が一時期に残されたセトルメントパターンを示しているものか、あるいはやや時間的な幅を持って連続的に残された遺物群として捉えられるのかも考えてみる必要がある。

5. ま と め

本論は、先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器文化の変遷を風間遺跡群第1地区第Ⅰ文化層（a）の石器群をもとに述べてきた。そして3段階にわたって細かく変化していく小形から大形の尖頭器を主要な利器とする石器文化は、いわゆる「神子柴・長者久保文化」からの大きな影響を持って派生したものと考えられた。

この神子柴・長者久保系石器群の特徴を簡単に述べると、周知のとおり槍先形尖頭器を主体とし、それに断面三角形の石斧が伴う石器群ということができようか。そしてこのような石器文化は先土器時代から縄文時代という大きな流れの中で、両者の転換期にあたり、先土器時代の影響を持ちつつ縄文時代へ移行していくものとして評価されよう。そしてこのような大きな変化が、先土器時代を代表する石器文化であるナイフ形石器文化から第1次尖頭器文化、そして細石刃文化というように変化し、この細石刃文化の衰退と共に「神

子柴・長者久保文化」である第2次尖頭器文化が派生し、そこに土器を持つ文化が編入（発生？）したことによって、生活環境の大きな変化にともなう新たな石器群の変動が起こっていったと整理することができる。先土器時代の中でナイフ形石器や細石刃のように組み合わせ石器を主な利器として使用していた中に、石斧と尖頭器という用途に直結した石器が出現したことを考えれば、「神子柴・長者久保文化」が果たした役割は非常に大きなものといえよう。そしてこの「神子柴・長者久保文化」が北海道・東北北部から南下してきた中で、石刃技法を保持しながらという直接的な伝播は認められないものの、尖頭器文化として寺尾段階に南関東地方にもたらされ、風間段階をピークとして本ノ木段階から有舌尖頭器あるいは植刃状の両側縁が平行する細身の尖頭器が組成に加わり変化していったものと考えられる。

しかしながら、土器が出現してくるという状況の中で、今回検証した神子柴・長者久保系石器群には、土器の発見されている遺跡と土器を持たない遺跡が混在している状況が認められている。本来、長者久保遺跡に見るように神子柴・長者久保文化には土器の存在が乏しく、むしろ舟底形細石刃核を持つ文化側に無文土器の発生の素地がありそうである。このように考えた場合、大形幅広の尖頭器を特徴とする石器群の中で風間Ⅰa、TN27、下茂内、房谷戸のグループに明確な土器の出土が見られないということは単なる現象の差ではなく、このグループに元来土器製作の伝統が乏しかったという文化系統の差として捉える必要もあろう。それは、関東を中心に見れば舟底形細石刃核の見える台地部と風間Ⅰaに見る丘陵山岳部という地理的、環境的差異の中にも土器出現の背景を見ることができる。

今回の編年では、各段階の画期として細石刃文化の影響を残しつつ尖頭器文化がそれに置き換わる段階、細石刃文化が消滅して大形幅広の尖頭器とそれに伴う「柄」に強い関連を示す抉入削器の発達する段階、尖頭器文化を保持しつつ有舌尖頭器や植刃状の石器への変化が見られる段階をあげてその移り変りを見てきたが、このような当該期の文化的な変化は、どの変化においても一律に移り変わるものではなく、大きな変革の中で系統差あるいは地域性も考えて行かなければならず、当該期の様相はまだまだ変化に富んだものであることが推測できよう。

おわりに

拙論は、「先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器文化」という大命題に対して南関東を中心とした尖頭器文化のごく短い時期の編年を組むことしかできず、凡日本的な当該期の変化を検討することができなかった。これは当該期遺跡の集中する東京西部から神奈川県における状況をまず地域的に整理しておくことが今後の研究に欠かせ

ないものと考えたところにもよるが、改めて、第2次尖頭器文化、「神子柴・長者久保文化」あるいは「本ノ木型石器文化」、そして土器の発生と言う文化変容の中で、南西関東地方は決してそれらの本流に存在したものではなく、国内的辺境、一種の吹き溜まり的現象を示しているのではないかとの感を強く持つものである。本論は「神子柴・長者久保文化」の中で関東地方の様相の一端を示すものとして、今後更なる御意見や御教示を賜って行きたいものと考えている。また、編年系統観あるいは土器の共伴関係などについては、調査担当者戸田哲也先生からの御教示あるいは討議をふまえた上でまとめたものであるが、その文責は筆者にある。

なお、戸田哲也先生、村田文夫氏には本誌への掲載の機会をいただいた。さらに、小田静夫、橋本真紀夫、佐藤宏之、小松真名、原川雄二、麻生敏孝、小菅将夫の諸氏には資料の見学や貴重な御意見をいただいた。末筆ながらここに記して感謝申し上げます。

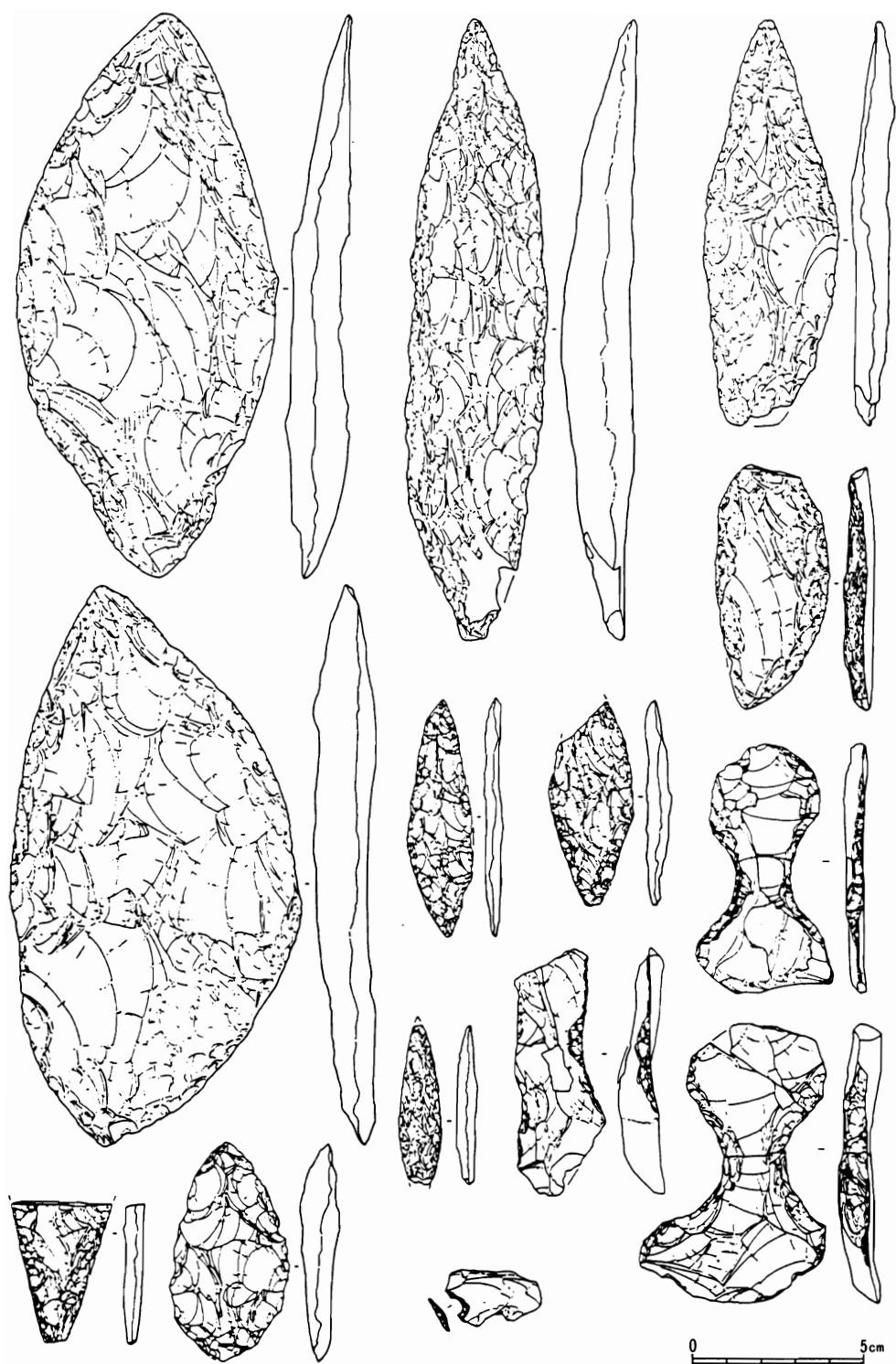
(註)

- 1) 報告書作成時に東京都埋蔵文化財センターの佐藤宏之氏の御配慮により実見させていただき、小松真名氏と原川雄二氏にはTN27の石器群について石器組成や石質組成などの有益な御助言をいただいた。
- 2) 報告では2枚の文化層として分離されているが、分布が異なり、遺跡地形が河川による浸食、堆積、運搬による複雑な地形であること、石質、石器組成による差がほとんど認められないことから、本論では一括してあつかうこととした。
- 3) 群馬県埋蔵文化財センターの麻生敏孝氏の御配慮により実見させていただき小菅将夫氏には房谷戸遺跡について御助言をいただいた。
- 4) 上野Ⅱの全磨製石斧については、余りにもその様相が神子柴・長者久保系石器群の系統とは考えられず、また、同一文化層にナイフ形石器も共伴するとしていることから、これらの石器は他文化層からの混入品の可能性が強いものと考えられる。
- 5) (堤 1991)、(諏訪 1991) 他
- 6) 小野田正樹は「半月形の両面石器」として捉え、尖頭器とは用途が異なる渡来石器としている(小野田 1978)が、今回の論稿の基本遺跡である神子柴遺跡、長者久保遺跡では認められていないことから、その系統については今後新たに分析を進める必要があろう。
- 7) 報告では2点の土器状の遺物が検出されているが、科学分析まで行っているものの積極的な評価をするまでにいたっていないことから、本論ではあつかわないこととする。
- 8) 白石浩之は草創期には刺突文系、沈線文系、縄文系、貼付文系、無文の5群の土器が存在するものとし、寺尾Ⅰの土器が本ノ木、前田耕地以前に位置づけられるものと修正している(白石 1990)。
- 9) 宮崎博の助言として鈴木次郎が述べている(鈴木 1989)。

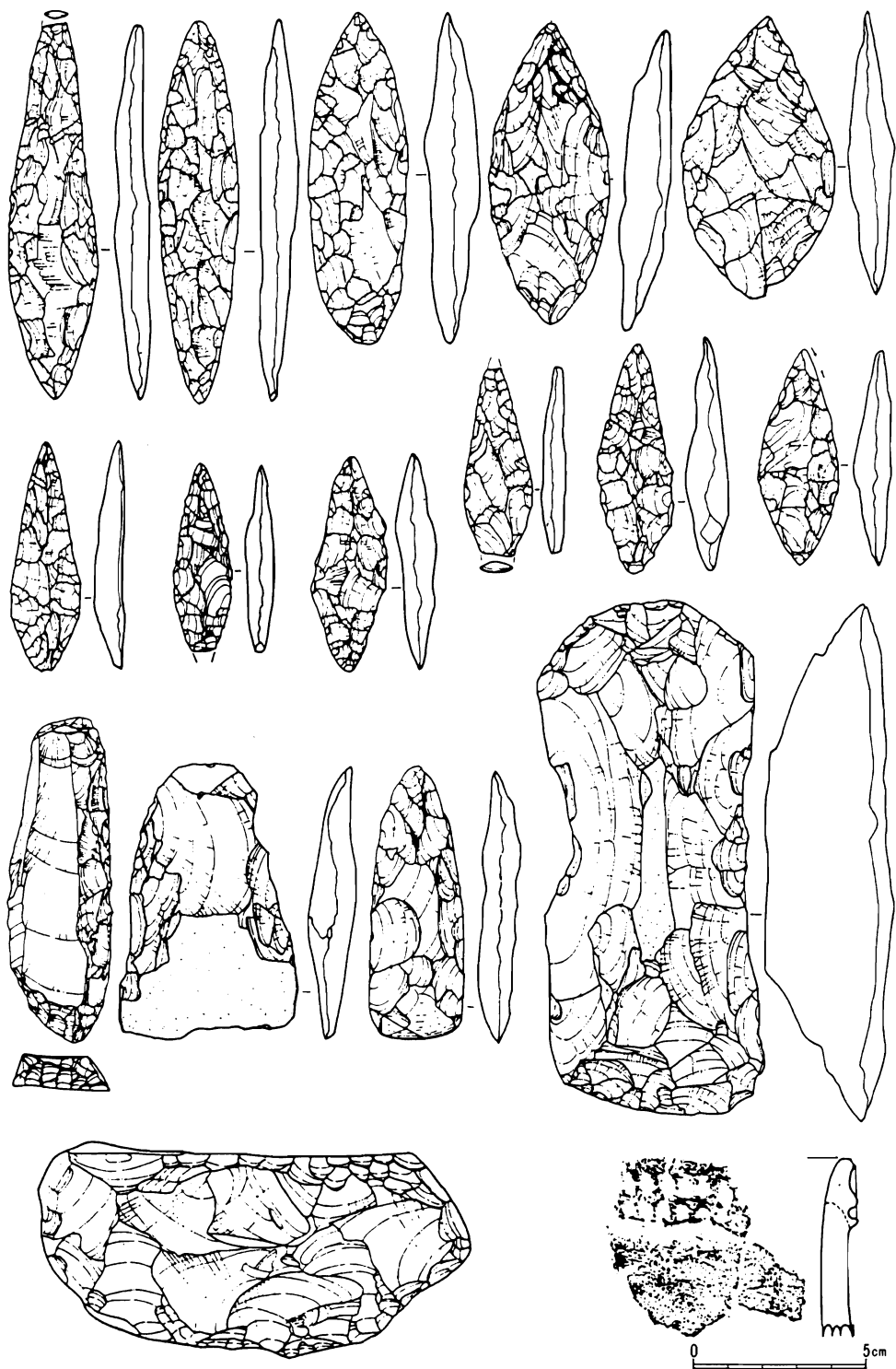
主要引用・参考文献

- 相沢忠洋 1967 「群馬県赤堀石山遺跡」考古学ジャーナル9
青木 豊・内川隆志 1990 「神奈川県勝坂遺跡第45次調査」考古学ジャーナル 324

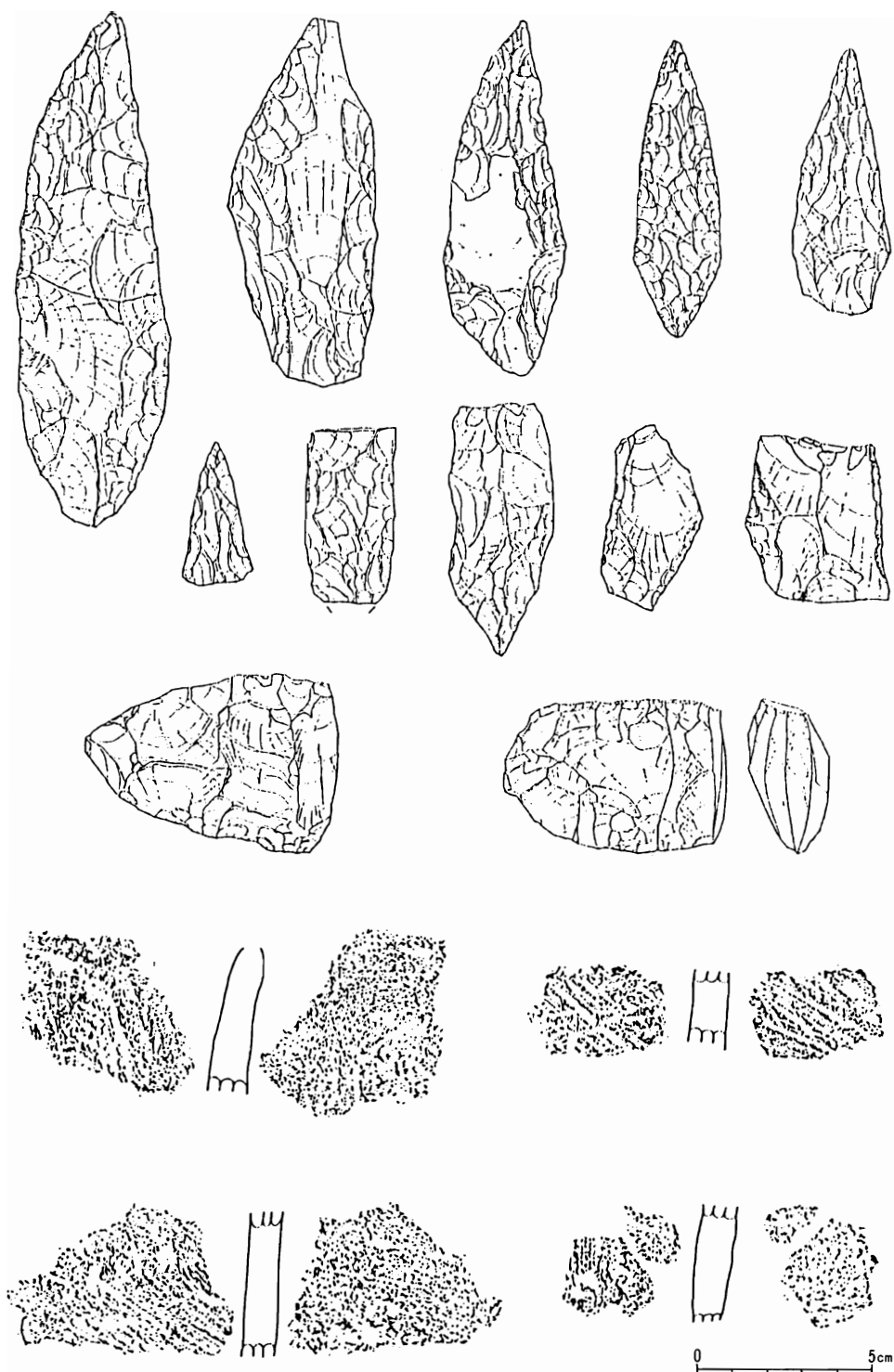
- 相田 薫 1986 「第Ⅱ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告第21集
秋川市教育委員会 1977 「前田耕地Ⅰ」他
- 麻生順司 1989 「第Ⅰ文化層（a）」『風間遺跡群発掘調査報告書』
- 伊藤恒彦 1988 「相模野台地の2種類の尖頭器石器群」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会
- 稲田孝司 1969 「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」考古学研究第15巻3号
- 後野遺跡調査団 1976 「後野遺跡」
- 岡崎完樹 1979 「多摩ニュータウン遺跡群No.27遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査概報－昭和54年度
- 岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化について」奈良国立文化財研究所学報35
- 小田静夫 1990 「田無南町遺跡の発掘調査概要」たなしの歴史2
- 織笠 昭 1992 「弥三郎遺跡」土気南遺跡群Ⅱ
- 小野田正樹 1978 「半月形の両面石器」に関する一考察」丘陵5
- 加藤 稔 1978 「弓張平遺跡」
- 栗島義明 1988 「神子柴文化をめぐる諸問題－先土器・縄文の画期をめぐる問題（一）－」『研究紀要第4号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 栗島義明 1991 「『本ノ木論争』から学ぶもの（一）」埼玉考古学論集
- 栗島義明 1991 「『上ノ平尖頭器文化』再考（上）（下）」古代文化第43巻第2号・第3号
- 群馬県史編さん室 1988 「房谷戸遺跡」群馬県史資料編Ⅰ
- 小池 聡 1991 「長堀北遺跡」大和市文化財調査報告第39集
- 近藤尚義 1992 「下茂内遺跡」上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1－佐久市内その1－（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告11
- 佐藤雅一 1988 「大刈野遺跡」湯沢町埋蔵文化財報告第9輯
- 白石浩之 1976 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について」考古学ジャーナル126・127
- 白石浩之 1980 「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告18
- 白石浩之 1989 「旧石器時代の石槍」UP考古学選書
- 白石浩之 1990 「本ノ木遺跡の意味するもの－縄文時代草創期研究の視点－」神奈川考古26
- 鈴木次郎 1984 「第Ⅲ文化層」『栗原中丸遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告3
- 鈴木次郎 1989 「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」神奈川考古25
- 鈴木次郎 1989 「相模野第149遺跡」大和市教育委員会
- 諏訪間順 1991 「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」中原第5遺跡B地点の研究
- 芹沢長介・中山淳子 1957 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」越佐研究12
- 田村 隆 1986 「元割遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』千葉県文化財センター
- 堤 隆 1991 「相模野細石刃文化における石器装備の構造」大和市史研究17
- 戸田哲也 1973 「千葉県南大溜袋遺跡の調査」考古学ジャーナル78
- 中村孝三郎 1966 「小瀬ヶ沢洞窟」
- 三宅徹也・岩本義雄 1976 「大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書」青森県立郷土館調査報告8



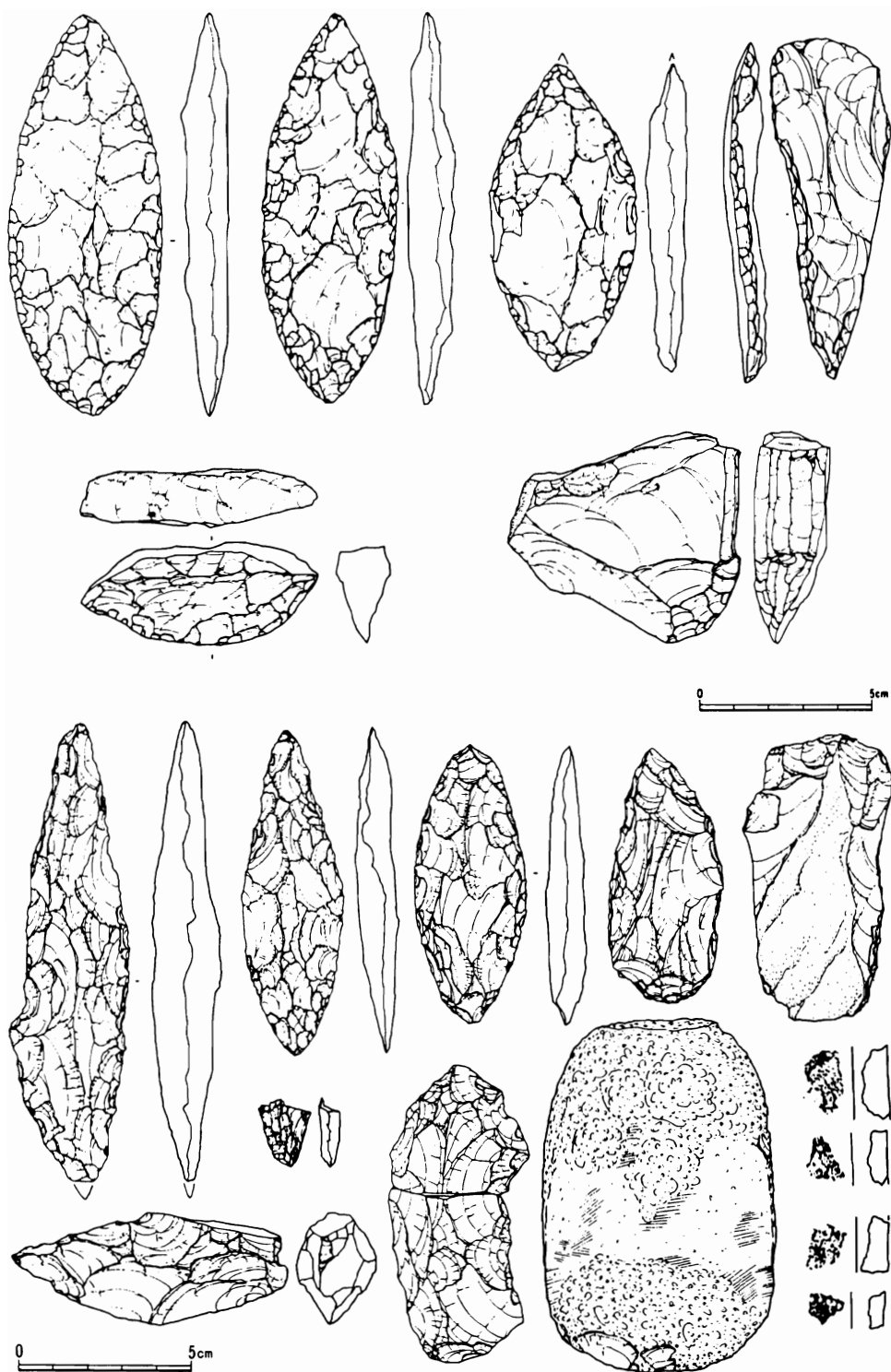
第1図 風間遺跡



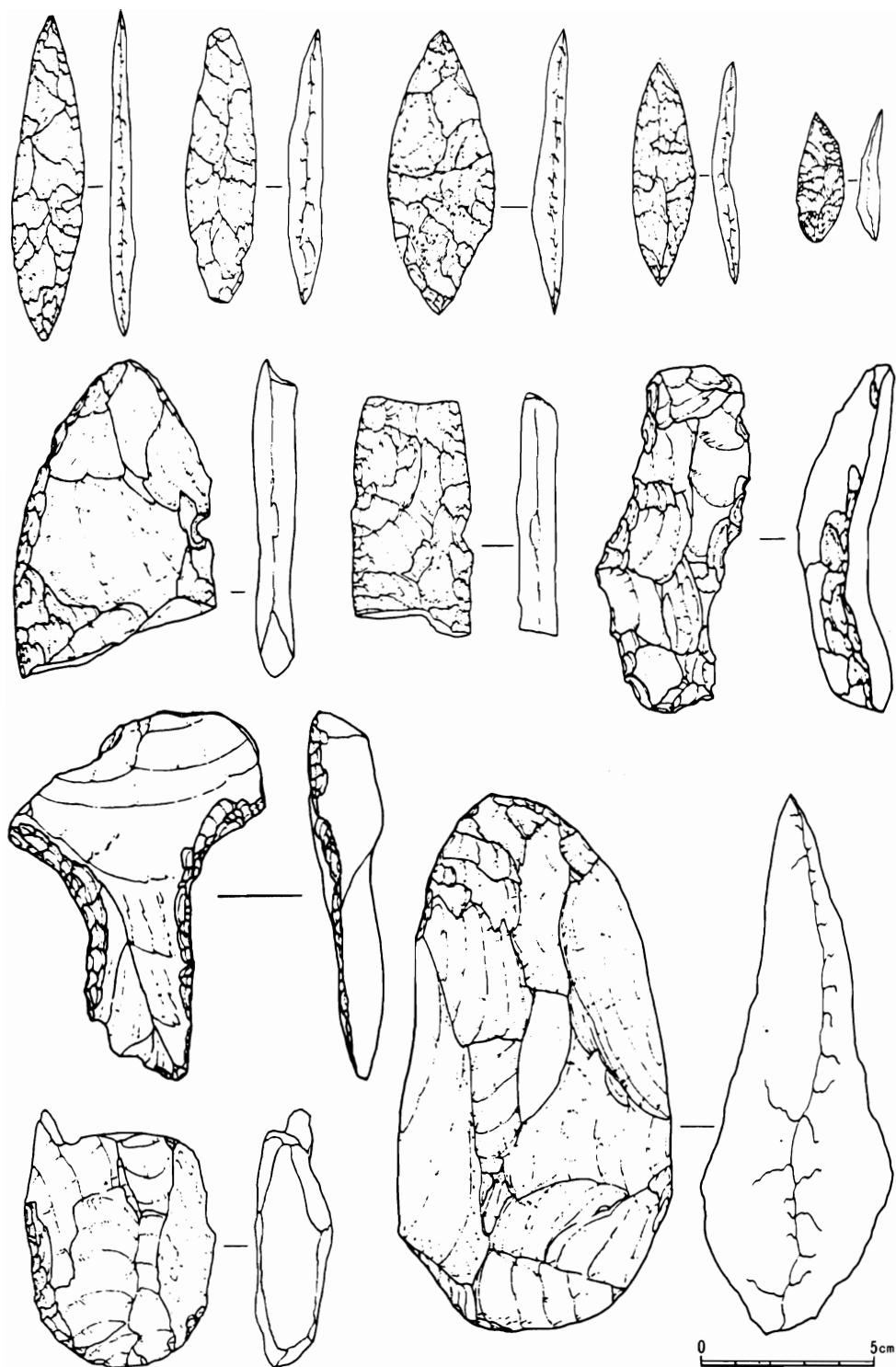
第2図 寺尾遺跡



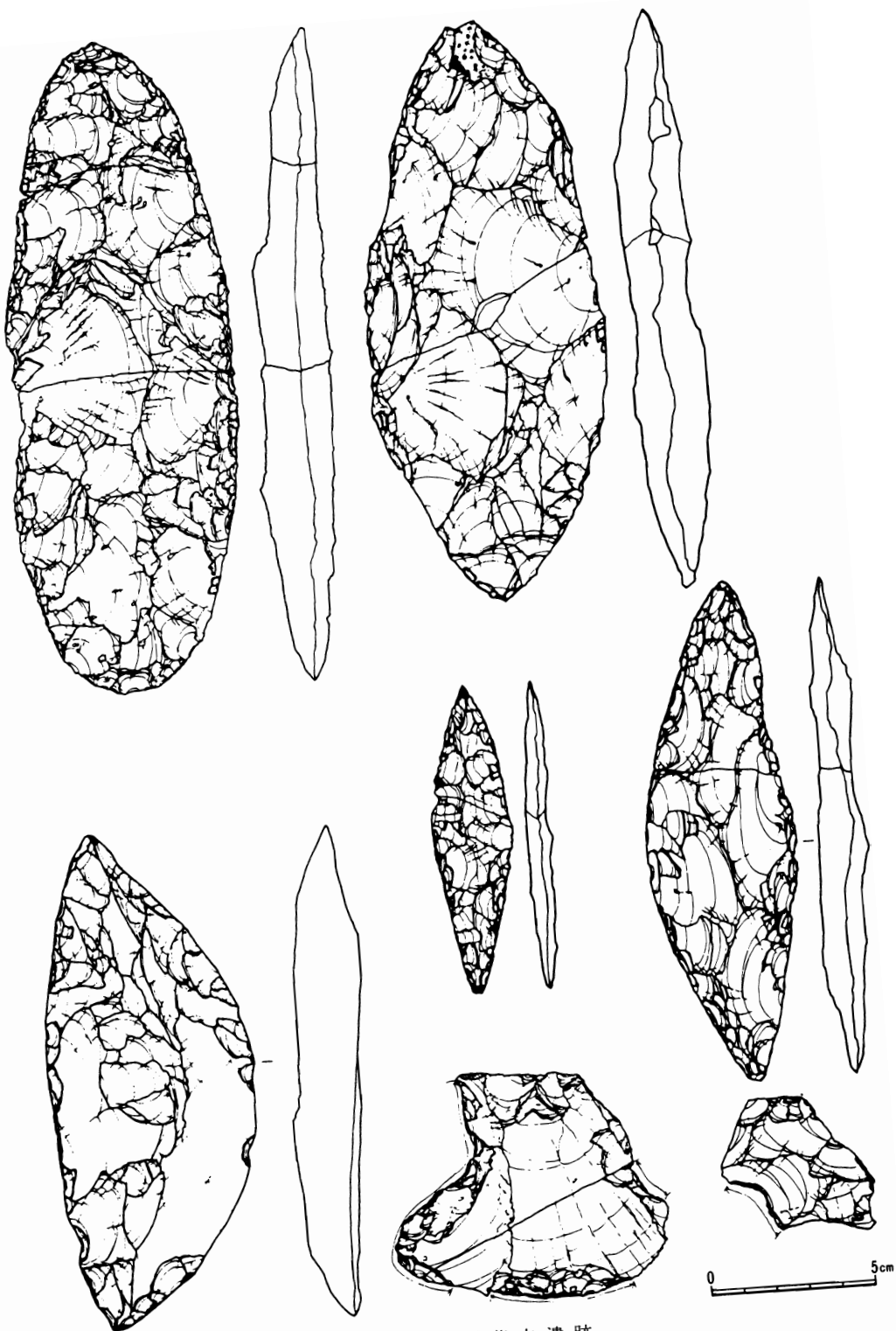
第3図 勝坂遺跡



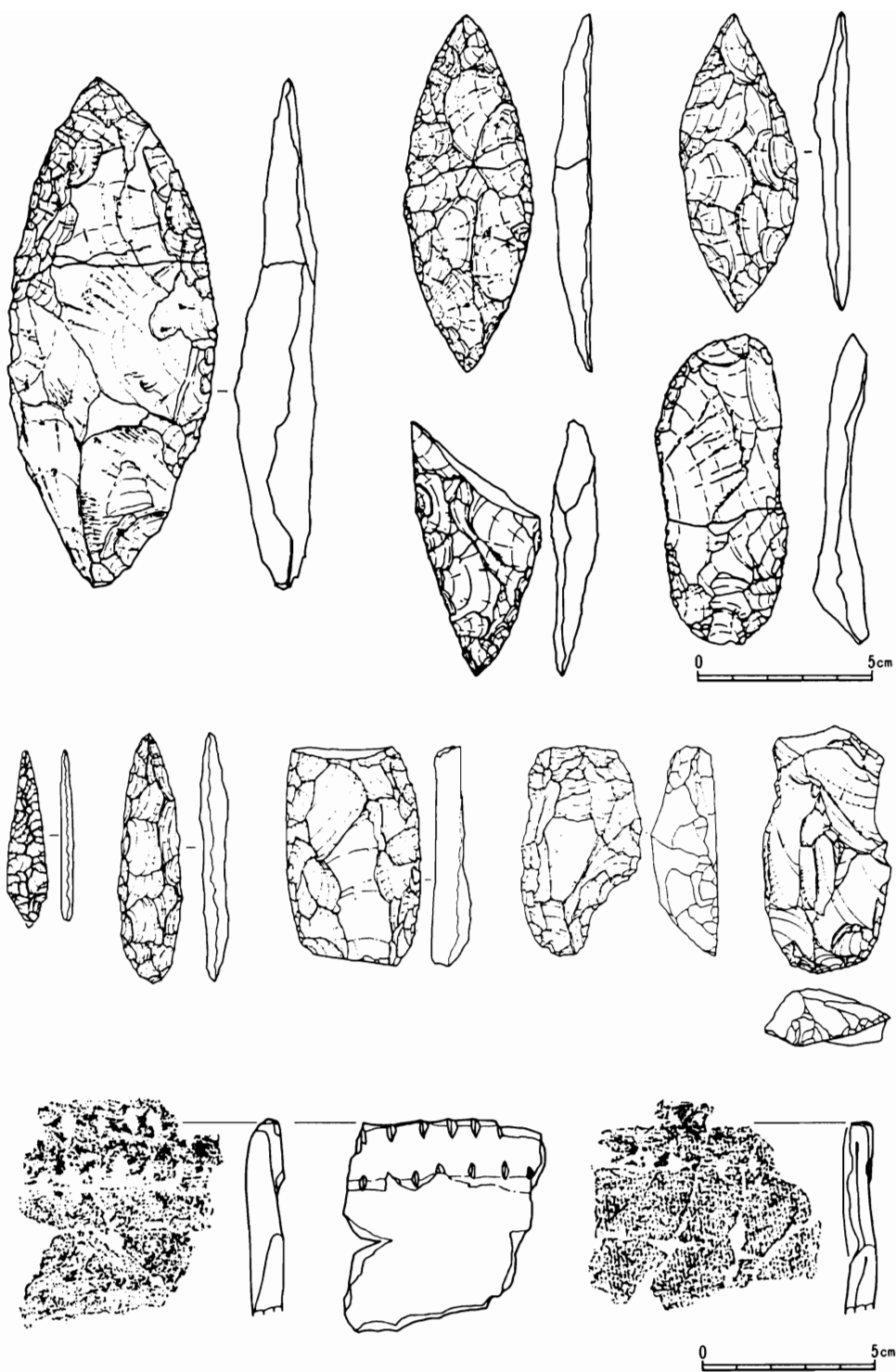
第4図 長堀北遺跡(上) 上野遺跡(下)



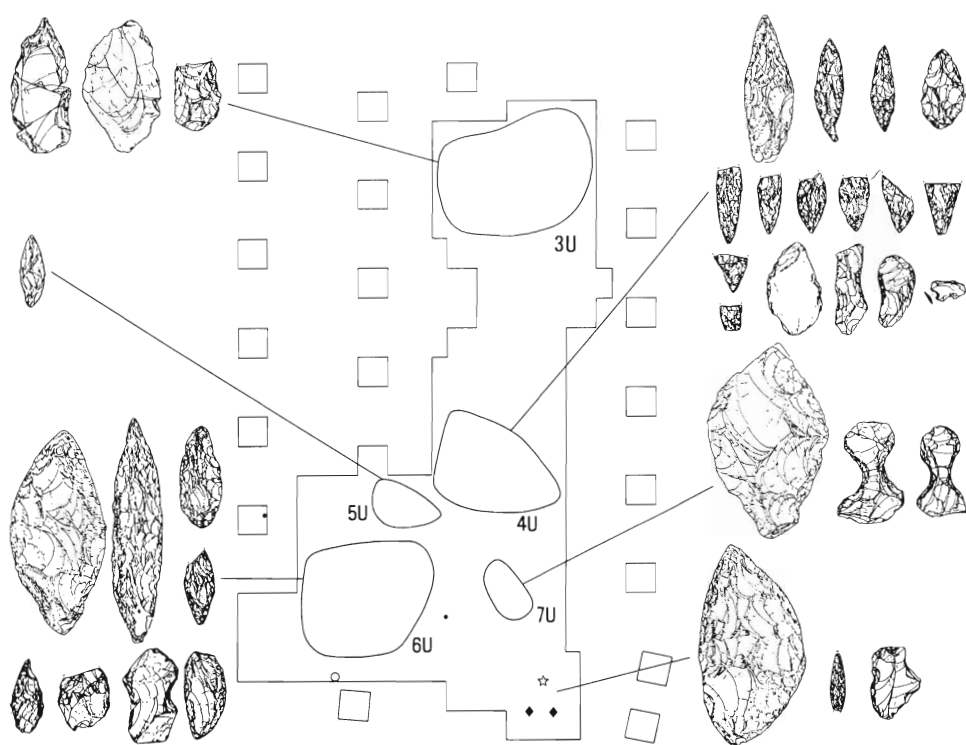
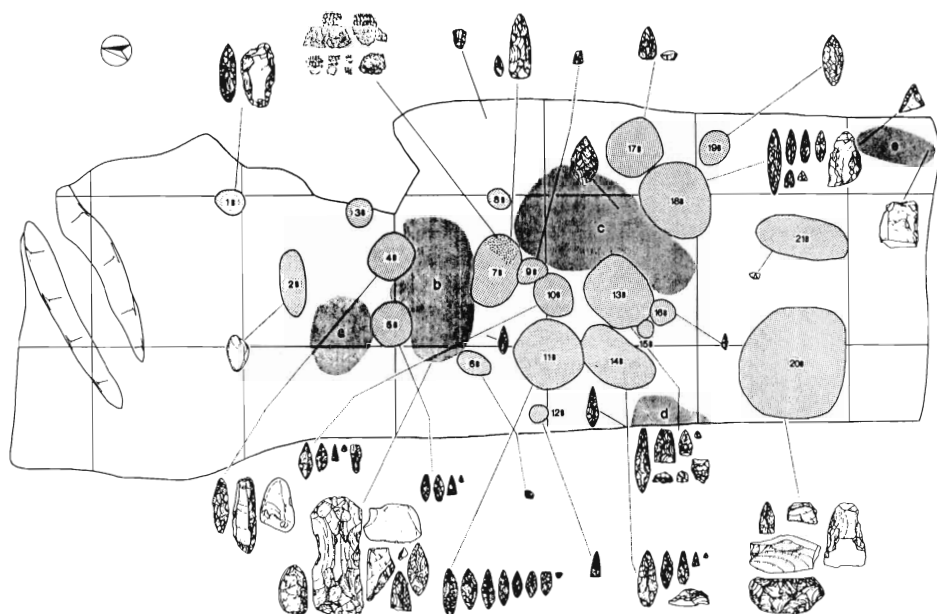
第5図 多摩ニュータウン遺跡群 No.27



第6図 下茂内遺跡



第7図 房谷戸遺跡（上） 相模野第149遺跡（下）



第8図 寺尾遺跡（上） 風間遺跡（下）石器分布図